［別紙２］

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　沢村 香苗

本研究は、精神科病棟において発生した誤薬の回避に関する要因を、患者特性、誤薬の特性、施設特性という複数の観点から明らかにしたものである。

本研究では、2000年10月1日より11月30日の2ヶ月間、全国44病院から選ばれた132病棟において調査を行った。132病棟のうち85の病棟から221件の誤薬について報告が得られた。報告はその誤薬を引き起こした者あるいは誤薬に対応した者がインシデント・レポートによって行った。インシデント・レポートの内容は、大きく１）患者の属性、２）誤薬の属性、３）スタッフの属性であった。

報告のあった 221 件の誤薬について、患者に渡る前に発見された（回避された）58 件を回避群、残りの 153 件を非回避群とし、回避に関連する要因を検討した。

主要な結果は下記の通りである。

1．服用している錠数が多いことは誤薬の回避可能性を低下させた。
2．統合失調症であることは誤薬の回避可能性を上昇させた。
3．入院回数の多さ（特に 4 回以上）は誤薬の回避可能性を低下させた。

以上、本論文は、精神科病棟において発生した誤薬が回避されることに関連する要因を明らかにした。発生後の誤薬の回避に関連する要因についての研究はあまり行われておらず、本研究の特徴は、発生後の誤薬の回避に関連する要因を検討した点、また患者の特徴だけではなく施設要因も合わせて検討した点にある。本研究は今後の誤薬による有害事象の発生を防ぐための臨床的な有用性を有しており、学位の授与に値するものと考えられる。